

レザー の 教室

Leather craft
classroom

1

キーホルダー



DE
FLA

今回の制作物



ベルトキーホルダー Belt Key ring

段染めの麻糸で飾り縫いしたベルトキーホルダーです。シンプルなフォルムに、特徴的な色合いのステッチラインがアクセントを効かせています。糸の色、革の色を自分の好みで変えるだけで、ハードなバイカー系から女性でもつけられるかわいい雰囲気を持たせることができるでしょう。腰の横あたり、ベルトにつけておけば、鍵やウォレットチェーンなどを留めておける便利なアイテムです。

制作レベル ★★☆☆☆☆☆☆☆☆ (10中2)

今回使用する道具



縫い針 (必須)



菱目打ち

4本目・2本目各1つを使います。

間隔は4mmピッチが良いです。菱目パンチがあればさらに便利です。



木づち



丸ギリ



カッター



ボンド（Gクリヤー） 木工用ボンドなどでも代用可



ヘラ付きへりみがき



ステッチンググルーバー



へり落とし



ゴム板（写真では大小2種類ありますが、どちらかあれば十分です）



ガラス板



革の仕上げ剤。トコフィニッシュ（これ以外にも、トコノールやふのりなど、お好みのものでOK）



ジャンパードット打ち (次ページの打ち台とセットで使用します。)



打ち台

今回使用する材料



革は多脂牛の焦茶（3.0mm）を使っています。サイズは型紙を参照してください。サイズはもちろん参考値なので、お好みで変更してOK。

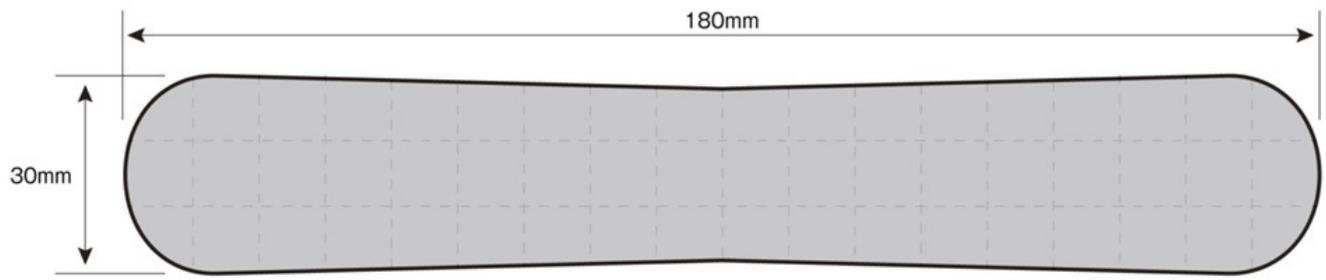
糸は段染めの麻糸（花しょうぶ、中細・20/3）を使用しています。縫い目にグラデーションがかかったような色の変化が楽しめます。

ナスカンは、ベルトループにつけるための金具で、今回は幅12mm程度のものを使っています。これは用品店などでいろいろなサイズ、種類が見つかるので、好きなモノを使ってください。

キーホルダーとつながる革は、ヌメ革の1.5mm厚を使っています。1.0mmだと強度的にやや不安があり、2.0mmだと縫い合わせるのが若干大変で、厚みが出すぎてしまいます。

留め具は、ジャンパードット（特大）を使っています。写真の4個のパーツで1組となり、10組一袋とかで、用品店で手に入ります。

型紙



今回使用する型紙はこちらになります。



革を型紙に合わせて切り出します。切革や端革でも十分切り出せる大きさです。毛羽立った床面にトコフィニッシュを塗ります。トコフィニッシュは、毛羽立った革の目を押さえるために塗ります。表側の銀面につかないように注意しながら、全体にまんべんなく伸ばしましょう。指で一方方向に伸ばすのがポイントです。



革の一方の端は、金具とつなげる革を接着するので、トコフィニッシュを塗る必要はありません。革が毛羽立っていたほうが強く接着できるためです。金具とつなげる革のサイズを確認し、そのスペースは塗らないようにしましょう。



トコフィニッシュが半乾き程度になったら、ガラス板の側面を使ってこすります。毛羽立っていた床面の表面が落ち着き、平らになります。力を入れすぎると革が伸びてしまうので注意。またいろいろな方向にこするのではなく、方向を決めてこすりましょう。その状態で、革が完全に乾燥するのを待ちます。

縫い線をつける（飾り縫い）



革が乾いたら革の表側となる銀面を向けて、縫い線をつけます。ステッチンググルーバーの金具を革の側面に沿わせて、キワから等しい間隔の縫い線をつけます。ここではステッチンググルーバーで溝を掘っています。ベルト部分は他との接触が多いため、糸に負担がかかります。そのため溝を掘り、糸を革の中に埋めるようにすることで、糸にかかる負担を軽減することができます。糸をはっきりと見せたい場合には、ステッチンググルーバーの先端を付け替えて、縫い線だけをつけてもよいでしょう。またコンパスのようにして使うディバイダーで線を引いてもOKです。



溝を革の全体につけたところですが、革の切り出しがまっすぐでないと、溝（線）も曲がってしまいます。写真では、下側の直線の切り出しが曲がってしまっていたため、溝も少々曲がってしまいました。



カーブは4本目では印がつけられないので、2本目に持ち替えて印をつけます。



菱目打ちで穴あけの印が付け終わったところです。印はなるべく全体が等間隔になるようにします。印の付け終わりの部分で、はじめにあけた部分とちょうどよく印がつけられるように、残り少なくなってきたら、印を付ける位置を微調整しましょう。

縫い穴をあける



菱目パンチで穴あけする場合、革を裏返して床面にも縫い線を引いておきます。ここではステッチンググルーバーの先端を付け替えて、線を引いています。こうすることで、菱目パンチで穴あけするときに、表裏で刃先を当てる位置が合わせやすくなります。



菱目パンチで穴あけします。菱目打ちと同じ4mm4本目の菱目パンチを使用し、銀面は穴あけの目安としてつけた印にあわせ、床面は縫い線の位置に刃先を合わせます。1目重ねてあけることで、曲がらずに穴あけできます。菱目打ちで穴あけするときは、ゴム板の上に置いて、菱目打ちをまっすぐ印に合わせて立てて、木槌で叩いて穴あけします。

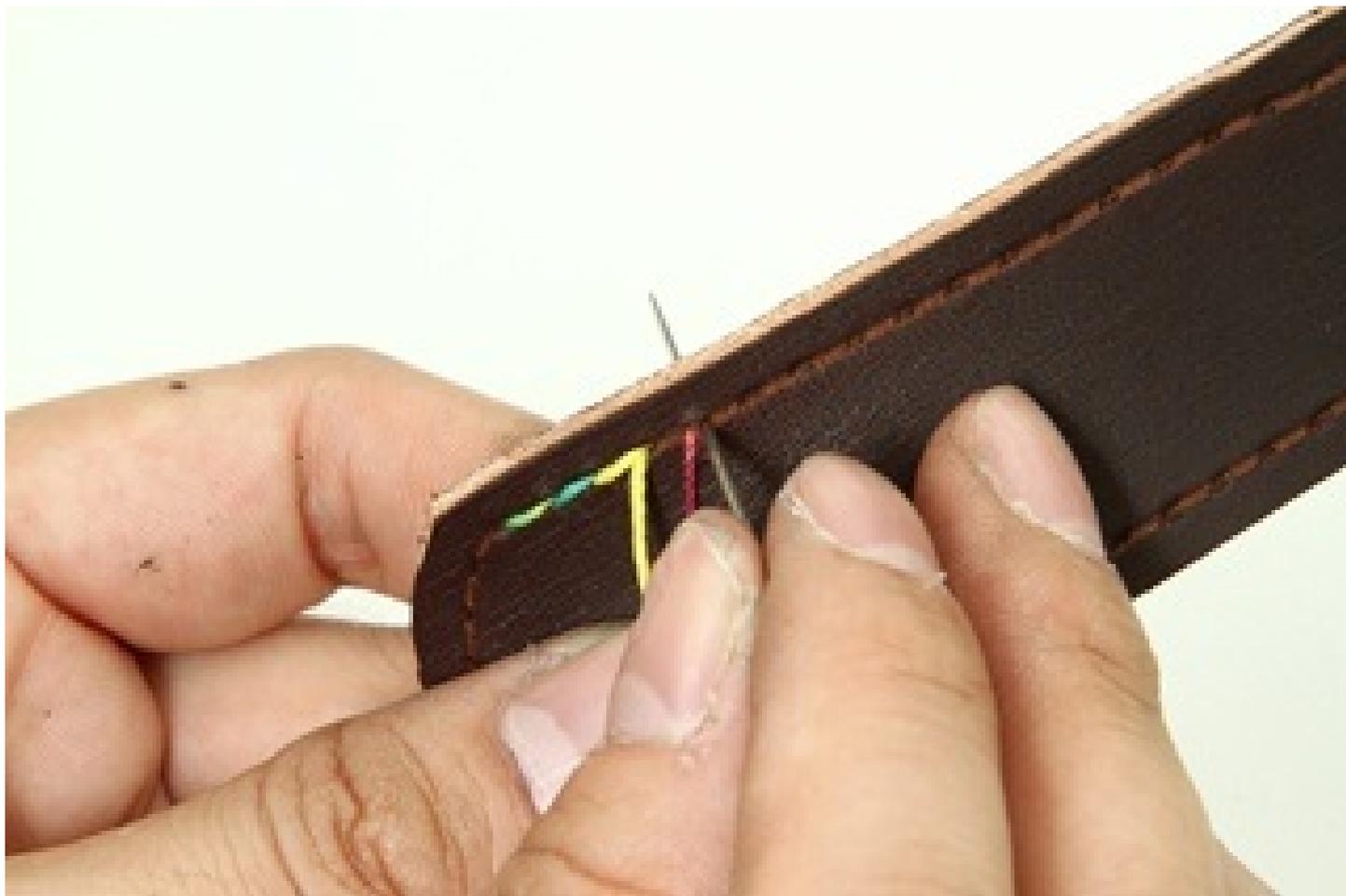


カーブの部分は、2本目の菱目パンチに持ち替えて、先につけた穴あけの印に沿って穴あけします。



穴あけができました。これで縫う前の準備は完了です。全体に等間隔に穴あけできましたか？

糸と針を用意して縫う



糸は縫う距離の4倍程度用意して、両端に手縫い針をつけます。縫い穴に針を通して、全体を縫います。ここでは革同士を縫い合わせるのではなく、飾りとしての縫いとなります。糸は段染めの麻糸（中細・20/3）を使用しています。



糸は力を入れて締め過ぎると、シワが寄ったり、糸が切れてしまう場合がありますので、たるみがない程度に軽く締めて縫い進めばOKです。はじめに糸を通した穴まで縫い進みます。



縫い終わりは、糸を二重に返し縫いして、2mm程度残してはさみなどでカットします。返し縫いは、これまで縫ってきた穴に二重に糸を通すことです。糸をカットしたら、糸にボンドをつけてとめます。ボンドは専用品もありますが、木工用ボンドで十分です。



縫い終わりました。段染めの糸は革の色によっては映えるので、おすすめです。焦茶の色とよくあって、飾り縫いした甲斐がありました。



縫い目に木槌の腹を押しつけて、糸をなじませます。木槌を横にして、普段使わないきれいな部分を押しつけます。すると縫い目が潰れて周囲と馴染み、少々の縫い目の乱れも目立たなくなります。強く押しつけすぎると、銀面に傷がつくおそれがあるため注意しましょう。

コバの仕上げ



革を二つ折りしてぴったり揃えてから、紙ヤスリでコバを削ります。コバとは革を切り出した部分のことです。切り出したままの状態でも作品によっては雰囲気が出ますが、ここでは角張った形から、磨きこむようにして丸い形に整えて仕上げます。両端を重ねて同じ形になるまで紙ヤスリで削りましょう。紙ヤスリは240番を使用。このあと、400番、600番、800番と少しずつ番手を上げていくと、きれいになっていきます。なお、革を削ると細かい粉となって舞うので、作業する場所の下に新聞紙などを敷いたり、外で行うとよいでしょう。



へり落としで、革の角を落とします。へりを落とすことで、コバを磨いたときに丸く仕上げやすくなります。もし角張ったコバがお好みであれば、へり落としは使わないでそのまま次に進みましょう。



コバを銀面の焦茶に合わせて、色をつけます。綿棒の先に少量の染料を含ませて、コバにつけます。綿棒の先はこするように動かさず、先端を転がすように指で回しながら少しずつ色をつけましょう。こするように動かすと、綿棒の先端の綿がほぐれて、銀面や床面に付着しやすくなってしまいます。

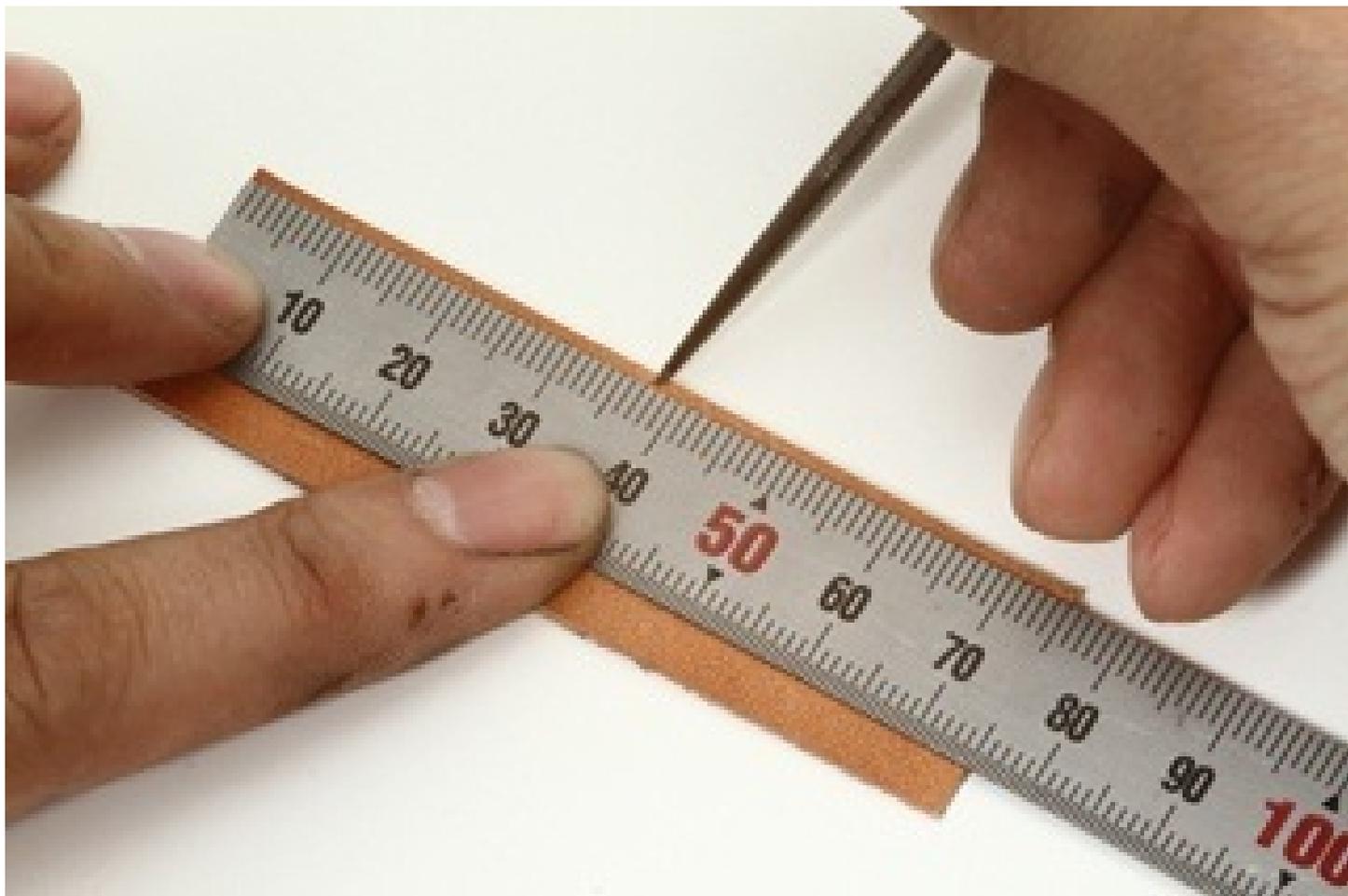


染料が乾いたら、トコフィニッシュをコバに薄く塗り広げます。この革は3.0mmと厚いので、塗りやすいでしょう。指先で薄く伸ばすようにして、コバに塗り広げていきます。



コバに塗ったトコフィニッシュが半乾き位になったら、ヘリみがきでこするようにして、コバの毛羽立ちを押さえっていきます。表裏からコバを押さえ、側面から当てるといふ順番にすると、コバが落ち着きやすいでしょう。このとき磨き棒がなければ、小さく切った綿の布(ウエス)を指に巻いてこするように動かしても、同様の効果が得られます。着古したTシャツなどが使えます。一度では完全に毛羽立ちを抑えることはできないので、磨き終わったら、800番程度の紙ヤスリで軽く削り、再びトコフィニッシュを塗って磨く、という作業を3回~4回程度繰り返しましょう。丁寧に繰り返すほど、コバに艶が出てきれいになっていきます。

本体と金具をとめる革



本体の革と金具をとめる革です。革はお好きなモノを使ってください。厚すぎると固定できないので注意。長さは75mmあります。この革を等分するところに印をつけます。定規を当てて、丸ギリなどでつけるとよいでしょう。



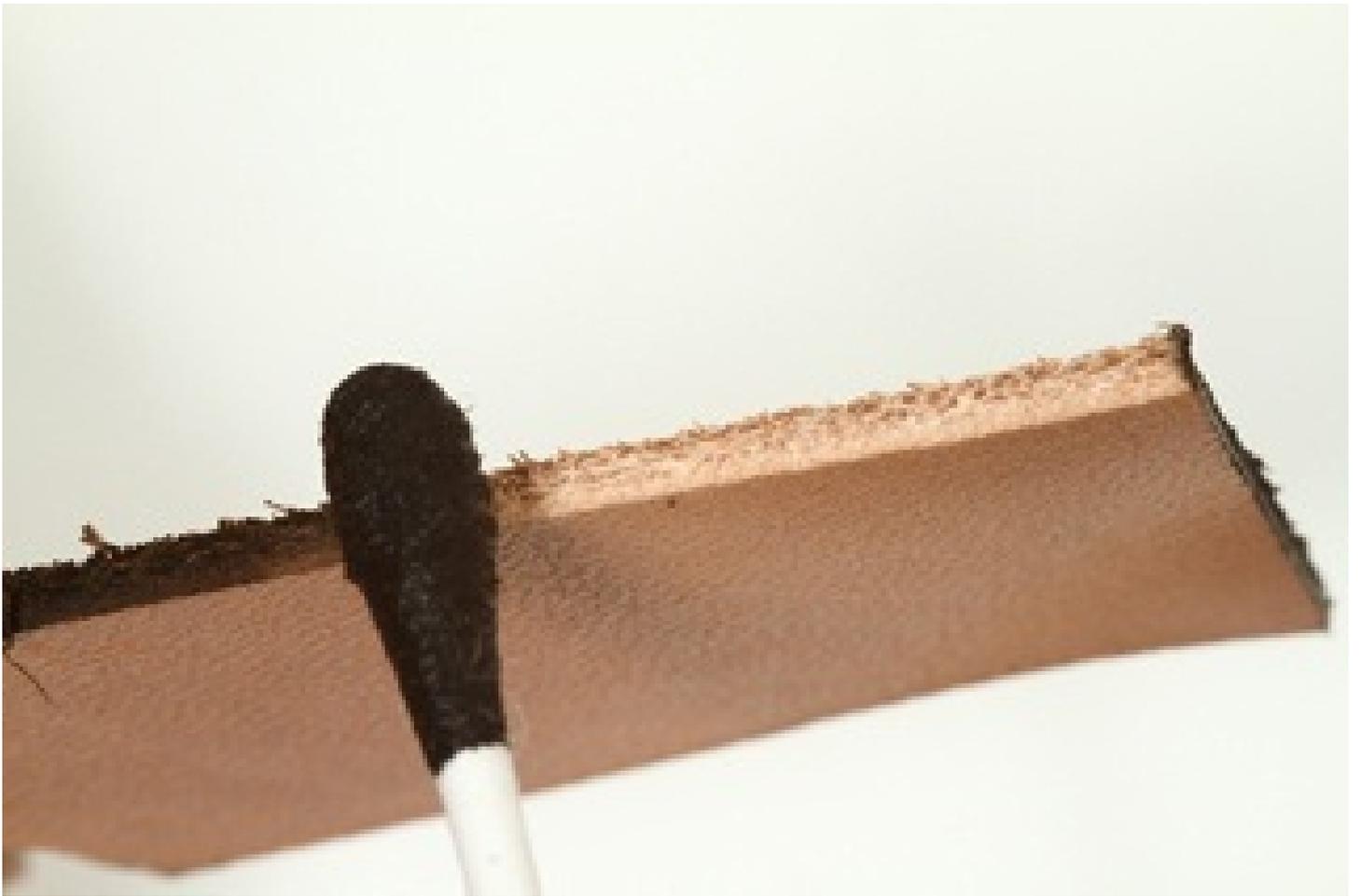
先につけた印を目安に、左右を等分する位置でハトメ抜きで半円状に抜きます。革に半分だけハトメ抜きの先端が当たるように押し当てて、木づちで叩きます。すると半円状に抜くことができます。これはナスカンに通す部分の幅が、もともとの革の幅では通らなかったためです。ナスカンの幅によって、この作業は不要になります。



半円状に切り抜いた部分をカッターで広げるように切ります。これもナスカンに通したときに当たらないようにするためなので、読者のみなさんが選んだ金具によっては不要となります。



ナスカンに当たる部分をカットした状態です。金具に当たる部分をカットし、全体的に幅広にすることで丈夫に仕上げることができます。



コバに色をつけます。ここでは本体の革の焦茶と合わせています。綿棒の先に染料を含ませて、銀面につかないように注意しながら塗りましょう。



染料が乾いたら、トコフィニッシュを塗って磨きます。ここも一度では毛羽立ちを押さえることができないので、数回繰り返して落ち着かせます。

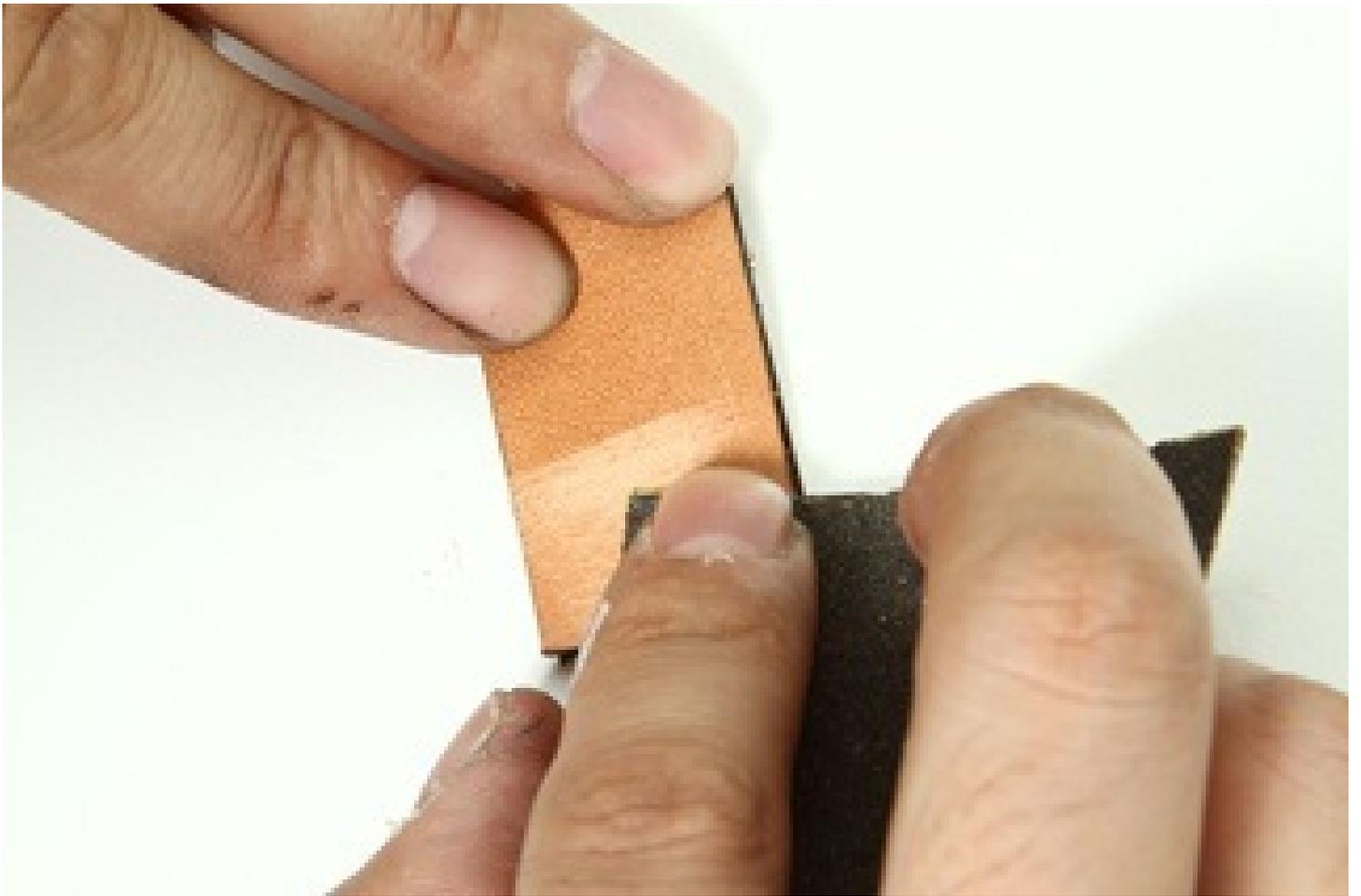


本体とナスカンとつなぐ部分の革の両方ができあがりしました。コバの毛羽立ちは押さえられましたか？

本体にナスカンをつける



ナスカンに本体とつなぐ革を差し込んで二つ折りします。切り込みを入れたのは、この時金具の内側に当たって、革が変形するのを防ぐためです。



本体につける方は、接着剤をつけるため銀面を紙ヤスリで削ります。紙ヤスリは240番を使っています。20mm程度、削る範囲を決めてから銀面を荒らすようにヤスリをかけます。ツルツルしたままの銀面よりも、紙ヤスリで面を荒らしておいたほうが、しっかりと接着することができます。



本体とつなぐ革を広げ、両端の床面を紙ヤスリで荒らします。ここも接着剤でとめるため、毛羽立っていたほうが、しっかりと接着することができます。



床面を荒らした部分にボンド（Gクリヤー）を塗ります。少量塗れば十分です。



本体とつなぐ革を半分に折り曲げて、接着します。ナスカンを挟むのを忘れないようにしてください。



銀面を荒らした部分に接着剤を塗ります。



本体にもボンドを塗ります。接着剤がはみ出すとカッコ悪いので、少量だけ塗ればOK。



接着剤は、急いで貼り合わせる必要はありません。10分くらい置いて、少し乾いてきた頃に貼り合わせます。20mm程度重なるようにしたほうが強度的に安心です。革の色合いがマッチしていい感じになってきました。貼りあわせた部分がずれないように、しっかりと押さえて圧着しましょう。



接着した部分を下にして、ハトメ抜きで穴あけします。ハトメ抜きは10号を使用しています。革に垂直に立てて、強く叩いて丸い穴をあけます。



ハトメ抜きであけた穴にジャンパードットを差し込みます。まずは打ち台の平たい部分を上にして置き、細長い筒のようなホソというパーツを下から差し込み、ゲンコを上からかぶせます。その状態で打ち具を上から垂直に当てて、木づちで叩きます。叩くことで金具が重なりあった部分が変形して、外れないように固定されます。これを「かしめる」と言ったりします。叩き過ぎると曲がったりする原因となるので、3回から4回程度強めに叩いたら、きちんとついているかを一度確認するとよいでしょう。指で触ってクルクル回るようなら、もう少しだけ叩きます。回らなければOK。それ以上叩く必要はありません。打ち具はジャンパードットのサイズによって適合するものが異なるので注意しましょう。購入時に打ち具と金具をセットで買い、適合を確認するとよいでしょう。



本体の革を等分して二つ折りします。取り付け金具には穴があいているので、そこから丸ギリを差し込んで、反対側の取り付け位置を決めます。本来は型紙上で位置を決めておくのが効率的ですが、現物に合わせて調整できるこの方法は、1つひとつ異なるサイズで作るときにも応用できる方法なので、覚えておくと便利です。



本体の革を開いて、丸ギリによる印がついているか確認します。丸ギリの先端に小さな穴があいているのがわかります



印に合わせて、ハトメ抜きで穴をあけます。ハトメ抜きは10号を使用しています。



打ち台の上に金具の頭を置きます。この頭の金具は頭はキーホルダーの外側から目立つ部分に位置します。形は球状に膨らんでいるので、打ち台の真ん中が凹んでいる部分に合わせて乗せます。



本体の革を重ねます。ハトメ抜きで開けた穴から頭の先端を出します。



頭の先端にバネを乗せます。この時革が厚すぎると、頭の先端がバネより上に出てこないことがあります。このような場合には、革が厚すぎるのでその部分だけ薄くするなどの工夫が必要となります。ここでは頭の先端がバネから出ているので大丈夫です。



打ち具をあわせて垂直に立て、上から木槌で叩いてかします。ここも3回から4回程度叩いてから、一度具合を見ましょう。力いっぱい叩けばいいというものではないので、具合を確認する必要があります。指で回らなければOKです。それ以上叩くと、金具が曲がったりするので、過度に叩いてはいけません。



以上でベルトキーホルダーの完成です。ベルトに通して、金具をつけてみましょう。ナスカンが下側に来るようにつけるのポイントです。

世界にひとつのモノづくりを楽しむ

まだこの世にない（かも知れない）モノ、欲しいけどよい市販品、既製品が見つからないモノを自分でつくる。感性をフル回転させ、頭を使い、手を動かしてモノをつくる。これってすばらしいことだと思いませんか？

現在は良い材料・道具が簡単に手に入るようになりました。ホームセンターや専門の用品店に行ったり、インターネットのホームページからボタンをクリックするだけで、素人でも良質の材料・道具を手に入れます。インターネットでは、それに呼応するように、アイデアと驚きに満ちた作品が次々と生み出され、発表されています。

DEFLAとは？

DEFLAは、オリジナルで制作したモノをもっと広めたい、あるいはこれからつくるときのヒントにしたいという人に向けて、クラフトに関するあらゆる分野を縦横無尽に駆け巡り、そのノウハウを伝達する出版社です。頭の中で思い描いたモノを具現化させる手助けとして、工程を細かい連続写真で解説していきます。読者の皆さんは、それを見て追体験しながら、イメージをふくらませてみましょう。なんとなく気になってご覧いただいた方で、つくるのははじめてという人でも大丈夫です。少しのやる気ときっかけさえあれば、誰でもつくることができるでしょう。そして本書を手にとっていただいたことが、すでに十分なきっかけとなっているはずです。

DEFLAの考え方

ある程度習熟した方にとっては、一見して物足りなさを感じるかも知れません。DEFLAでは、正しい技法・方法の伝達という点よりは、初心者でもなるべくゴールに辿りつけることを重視して解説を加えています。そのため、物足りなさに加えて、間違いと思われる箇所に出会うかも知れません。あるいはこうしたほうがより効率的、効果的という方法をご存知の方もいらっしゃるでしょう。そのとおりです。それは個々の制作者の技法やレベル、道具の有無といった事情によるところもありますが、一番の理由は道具の使い方や加工の手順なんて自由だということなのです。クラフトに使う道具において、こう使わなければいけない、こうしなければいけないという発想はありません。もちろん使用説明書があればよく読み、購入時に習熟者から教示されたことは尊重すべきです。それに危険を伴う行為は、DEFLAとして決してオススメするわけには行きません。しかし自己責任の元、自分なりの使い方や制作の進め方を見つけ出した場合、DEFLAではむしろその方法を喜んでご紹介させていただきます。このため、いわゆる技法・技術書とは明確に一線を画した、プライベートな内容となっています。なぜこんな方法をとっているんだろう、どんな都合があるんだろう、とご笑覧ください。

はじめての方へ

初心者からある程度その分野に慣れ親しんでくると、先達たる熟達者がいて、奥深く広いことを実感できるでしょう。少し楽しみたい人は、そんなことを気にする必要もなく、表紙にある完成の状態まで、どのようにすれば最短距離で辿りつけるかを考えましょう。その分野に慣れ親しみ、もっとドップリ浸かってみたい、知りたい！と思った人はどんどん突き進みましょう。そして熟達者が採っている方法をマネしてみましょう。なぜその方法なのか、なぜその道具を使わなければならないのかなど、1つひとつに理由があります。ドップリ浸かっていくほど分野の奥底、そして全体像が見えてきます。そして意外な分野の道具が活かせたり、根元の部分でつながっていることに気づき、自分なりの工夫を生み出して行くことができます。

あせらずゆっくり取り組み、イメージをふくらませて、制作手順を検討しましょう。そして世界にひとつだけのアイテムづくりに活かしてください。

あなたの毎日を、明るく楽しく送るよすがとならんことを願います。

本書の無断転載・再配布を禁じます。使用範囲は、個人での閲覧に限ります。無断転載・再配布が発覚した際には、相応の費用を請求させていただきますのでご注意ください。

本書はクラフト全般につき、分野ごとの技能修得者による制作方法をまとめたものです。制作は技能習得者の方法を尊重しているため、教科書的な正しい方法から逸脱したものや、場合により危険を伴う方法も含まれています。また入手困難な道具や一部加工を加えた道具を使用する場面もあります。そのため、すべての読者において同一の成果が得られることを保証するものではありません。

制作の実践にあたり、材料・道具の入手・加工方法等は記載通りであり、記載なきものは、解説の域を出るものです。制作の実践における問題解決は、読者に委ねられるものとします。また制作の内容によっては、物理的損害・傷害が起こりうる可能性があります。制作により生じた物理的損害・傷害その他一切の危険可能性について、当方では一切その責を負いません。実践に際しては、十分な検討と準備を行なってください。

レザーの教室 1 : キーホルダー編

<http://p.booklog.jp/book/32740>

著者 : defla

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/defla/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32740>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32740>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.